

『榻鳴曉筆』における日蓮著作の影響

——卷十、第二十五「輪陀王」をめぐって——

小 椋 愛 子

一 はじめに

『榻鳴曉筆』（以下、『曉筆』）は、室町後期に成立した説話集だが、未だに作者が特定されていない作品である。作者については、江戸時代に「一条兼良」説や、日蓮宗の僧侶説、なかでも「日信」説などが提唱されたが確定には至らず、当時すでに不明であった。たしかに『曉筆』中には「法華経」に関する語が散見し、なかでも「本門」優位の姿勢が見られる。また、『法華経』やその思想を、解釈の論拠として総括部分で用いる傾向があり、他の經典の用い方とは差異も見られる。これは、作者が日蓮宗の僧と目されたことから妥当であるが、その一方で日蓮の名や著作名、それに関する語は記されない。しかし、日蓮の著作を撰取していると推察できる箇所は複数見られる。本稿では、卷十（似類下）第二十五「輪陀王」を取り上げ、日蓮著作をどのように撰取しているか、またその意味を考察したい。なお、『曉筆』の引用は、市古貞次校注『榻鳴曉筆』（中世の文学／三弥井書店）により、以下、「中世の文学」とする。

二 『曉筆』卷十（似類下）第二十五「輪陀王」の出典について

『曉筆』中、日蓮の著作を出典としていとなると考えられるものは複数あり、その一部に関しては以前考察した。⁽¹⁾ここでは『曉筆』卷十（似類下）第二十五「輪陀王」を取り上げる。本話は、「中世の文学」の市古氏の頭注に「『釈摩訶衍論』一。日蓮の「上野殿母尼御前御返事」等にも記される」とある。この二書にも記述はあるが、より近似するのは、日蓮の『曾谷殿御返事』と考えられ、さらに日蓮の『内房女房御返事』とも類似する。

卷十（似類下）第二十五「輪陀王」は、乃往過去に閻浮提にいた輪陀王の話。王は白鳥の鳴き声を聞くと嘶く白馬の声を好み、それを供御（本文には「御供」とあるが、文脈から「供御」の意）にしていたが、ある時、白鳥が一斉に姿を消し、白馬が鳴かなくなる。そのとき一人の沙門が、王が仏法に帰依することを条件に白鳥を祈り帰して白馬を鳴かせたという。この功によりこの沙門を「馬鳴」というとして、「馬鳴」の名の由来譚ともなり得ている。また、末尾に二字下げの別記文⁽²⁾があり、前半で原典に着目し、後半で「馬鳴」についての疑問を挙げている。

今云、此事予嘗釈摩迦衍論を披し時見しやうにおぼへ侍るはひが事にや。又付法藏の第十二祖馬鳴といひしは中天竺の外道也。協尊に伏せし人なり。輪陀王の因縁は過去の事也。両儀可留心。
(傍線筆者)

まずは、この記述をふまえながら本話の出典を検討する。傍線部に「ひが事にや」とあるため、直接の典拠は「釈摩訶衍論」ではないと判断できるが、本話の内容を「釈摩訶衍論」を披いたときに見たようだと記すように、輪陀王の話は「釈摩訶衍論」（以下、「衍論」）巻一に見られる。該当箇所を次に挙げる。

論曰。馬鳴菩薩若剋^レ其本^一。大光明仏。若論^二其因^一。第八地内住位菩薩。西天竺誕生。盧伽為^レ父瞿那為^レ母。同生利益。過去世中有^二一大王^一。名曰^二輪陀^一。有^二千白鳥^一皆悉好声。若鳥出^レ声大王増^レ德。若不^レ出^レ声大王損^レ德。如是諸鳥若見^二白馬^一即出^二其声^一。若不^レ見時常不^レ出^レ声。爾時大王遍求^二白馬^一終日不^レ得。作^二如是言^一。若外道衆此鳥鳴者。都破^二仏教^一。獨尊^二独信^一。若仏弟子此鳥鳴者。都破^二外道教^一。獨尊^二独信^一。爾時菩薩用^二神通力^一。現^二千白馬^一鳴^二千白鳥^一。紹^二隆正法^一。令^レ不^二断絶^一。是故世尊名曰^二馬鳴^一。

（釈摩訶衍論）一『大正新脩大藏經』第三十二論集部

比較すると「衍論」では傍線部のように、白鳥が好声で、その白鳥は白馬を見て鳴くとして、白馬と白鳥の関係が本話とは逆になる。そのため、王が好む声も逆である。また、白馬を得られず白鳥の声が聞けなくなつた際に波線部のように、「白鳥」を鳴かせることができた教えを「独尊独信」すると王自らが宣言している。そのため、来訪の沙門が白鳥が消失した原因を語り、条件を提示する本話とは違いが見られる。

この「衍論」の記事は『仏祖統紀』や『翻訳名義集』でも引くが、白馬と白鳥の関係は「衍論」と同様で、本話とは逆である。また、和書では、中世（一二九六年前）に成立の『宴曲抄』下「馬徳」にこの故事が見られる。

竜樹菩薩の論釈に。隔檀往向を分つ、円円海徳をあらはひしも。起信大乘によりてなり。是又馬鳴の製作。されば此論師の名字の。其古を詢ば。過去の輪陀の在世かとよ。千の白馬を献じつ、千の白鳥を鳴しめて。正法を紹隆せし故に。即馬鳴の名を得たり。

（『統群書類従』十九輯下、傍線筆者）

傍線部「竜樹菩薩の論釈に」から、原拠が「衍論」とわかる。これもこれまでと同様、白馬を見て白鳥が鳴く（点線部）パターンである。

これに対して、日蓮が信者らに送った書簡である、『曾谷殿御返事』^③、『内房女房御返事』、『上野殿母尼御前御返事』の三種（以下、これらを三書とする）に挙げる輪陀王の故事は、白馬と白鳥の関係が本話と同じである。三書について簡単に説明する。

『曾谷殿御返事』（以下、「曾谷殿」）は、弘安二年八月に日蓮が曾谷道宗に宛てた書簡。道宗から焼米の供養を受けたことを述べた後、諸経の中で法華経が優れていることを説き、その題目の功德を説明する譬喩の一例にこの故事を挙げる。書簡末尾で、梵天、帝釈らや日本の神祇を輪陀王に、白馬を日蓮に、白鳥を一門、白馬が鳴くことを「我等が南無妙法蓮華経」の声に譬え、「故大進阿闍梨」の死去を嘆きながらも法華経流布の因縁になることを述べている。

『内房女房御返事』（以下、「内房女房」）は弘安三年八月に内房女房に宛てた書簡。父の百箇日の布施料を受けたことに続けて願文の内容に触れ、法華経や題目の功德を説く中で輪陀王の故事を挙げる。末尾で前掲の「曾谷殿」同様に、故事を手紙の縁者らに譬えている。

『上野殿母尼御前御返事』（以下、「上野殿母尼御前」）は弘安三年十月に上野殿母尼御前（南条時光の母）に宛てた書簡。故七郎五郎の四十九日の供養に種々送られたこと、菩提のために「法華経一部・自我偈数度・題目百千返」を唱えたこと、法華経が最善であることを説き、諸仏が法華経を守護する説明の譬えで輪陀王の故事を引く。末尾は故五郎殿が法華経の功德で「りやう山浄土」へ参ったこと等を述べ、他の二書のように故事を縁者になぞらえてはいない。

いずれも輪陀王の故事を法華経（題目を含む）をめぐる譬喩の一つとして用いるが、その内容は三書で差異が見られる。これは、日蓮が書簡を送る相手に合わせて故事を変えているためであろう。

ここで、「衍論」、三書、『暁筆』を比較して「衍論」と三書の関わり、さらにそれらと『暁筆』との関係を考察する。そのため、【表1】で輪陀王故事の梗概を項目で列挙し、【表2】で各書の構成を【表1】の記号で並べて示した。【表1】は、各書の内容全てを含むように項目を挙げ、「衍論」にある項目の記号を太字で示した。その際、白馬、白鳥の関係は、三書、

『暁筆』に従うため、その関係が逆の「衍論」については、その旨を括弧書きで記した。

【表1】 輪陀王故事の梗概（「衍論」、三書、『暁筆』を全て含む）

A 輪陀王の名の提示と紹介

B 千羽の白鳥が全て好声なこと（「衍論」のみの記述）

C 輪陀王の供御の説明

D 白馬（「衍論」は「白鳥」）の鳴き声の効果

E 王が鳴き声を好み白馬を集めていたこと

F 白馬（「衍論」は白鳥）の鳴く条件

G 白馬を鳴かせるため、多くの白鳥を集めていたこと

H 白鳥が失せた原因の推測

I 白鳥が一齐に消失し、白馬が鳴かなくなったこと（「衍論」は遍く白馬を求めたが、終日得られなかったことのみを記す）

J 白馬の鳴き声を聞けなくなった王や周囲の様子

K 王が外道と仏法の内、白馬（「衍論」は白鳥）を鳴かせた方の教えのみを信じると宣言

L 外道が祈祷を試みるが、白鳥が現れず効果がなかったこと

M 仏弟子の中に「馬鳴」がいたこと

N 馬鳴が王に仏法を弘通（仏法に帰依）することを条件に、白馬を鳴かせることを奏す

O 王が馬鳴の申し出を承諾する

P 馬鳴が祈請（「衍論」は神通力）して白鳥（「衍論」は白馬）を現じて白馬（「衍論」は白鳥）を鳴かせたこと

Q 再び白馬の鳴き声を聞いた王の様子
R 王以外の人々の様子やその後の国の様子
S この行為が馬鳴の名の由来であること

【表2】 各書の構成の比較

構成		書名
S (R) *****	P K I F D B A	「釈摩訶衍論」
R Q P O N M L K J I H (D) *****	G F E D C A	「曾谷殿御返事」
R Q P M L K J I H F D C D *****	A (C Dの順が逆)	「内房女房御返事」
R Q P { (R Q R と交互に) } M L K J I G F E D C A		「上野殿母尼御前御返事」
S Q P O N (M) *****	J I G F D C A	『榻鳴暁筆』

* Cの説明のため、先にDの内容に触れる。

* Gに続けて白鳥を集めていたため（白馬が鳴き）王のみならず国が栄え他国も頭を垂れたことを述べる。そのためDとして括弧書きで示した。
*** 勅宣に際してや勅宣の中で国の宗教情勢を述べる。

*** 『暁筆』は「馬鳴」の名は記さず、「沙門一人」とするが、この人物を際立たせるという意図は同じため、括弧書きで示した。

*** 一部、Rともとれる内容がある。

***** 「紹隆正法一令不絶」とあるが、馬鳴の行為の結果として記し、その国の具体的な状況は記さない。括弧書きで示す。

【表2】から、「衍論」はA B D F I K P (R) Sの項目で構成され、三書は「衍論」のB(千羽の白鳥が全て好声なこと)とS(この行為が馬鳴の名の由来であること)以外は全て摂取し、さらにこれに複数の項目を付加していることがわかる。三書は白馬と白鳥の関係を「衍論」と逆にするからBは内容的に摂取できず、それに代わるE(王が鳴き声を好み白馬を集めていたこと)を付加する。また、これ以外に三書が付加するC G H J L M N O Qは、「衍論」の内容(A D F I K P)に対する詳細な描写やその説明である。「衍論」が骨子のみを述べるのに対して、三書は個々の事柄を詳細にし、その事柄同士の因果関係を明確にすることで、展開や内容を理解しやすくする。例えば「衍論」は、王が白鳥の声を聞くことで徳を増すこと、白鳥は白馬を見て鳴くが、或時白馬を得られなかったことのみを記すが、三書はそれにC(王が白馬の声を供御としていたこと)やG(白馬が鳴く原因である白鳥も集めていたこと)を付加して、供御とする白馬の鳴き声を絶やさない努力をしていたことを示す。これにより、後にそれが欠けた際の深刻さも理解しやすくなる。また、K(王の宣言)の直後に「衍論」ではすぐに結果(馬鳴が鳴かせたこと)を記すが、三書はL M N Oの内容(外道の祈祷の様子や「馬鳴」が条件を出したことなど)を付加して、その経緯や状況を詳細に提示している。

このように、三書は「衍論」の核となる要素を全て摂取し、それを補う形で付加していることから、「衍論」が原拠といえる。但し、白馬と白鳥の関係を逆にして摂取する。これは「馬鳴」の名の由来としても、「馬」が鳴く方が妥当なためであろうか。三書は「衍論」を原拠としながら意図的に変容させている。

『晩筆』は、白馬と白鳥の関係が三書と同じで、且つ「衍論」になく、三書が付加しているC G J M N O Qの内容を有している。このように、構成が三書と同様であることからこれが典拠と推定できる。また、特に仏弟子の中で馬鳴を際立たせ、なかでもN、Oと馬鳴が条件を出し、王の承諾を以て白馬を鳴かせる構成は、「曾谷殿」と近似していることが理解された。

三 三書からの摂取方法

前章で『暁筆』巻十、第二十五「輪陀王」の典拠が日蓮書簡（三書）と推定でき、構成上は「曾谷殿」と近似することを確認した。ここでは、本話と三書の関わりを表現の比較から検討し、その摂取方法を考察する。以下、先の「表1」の梗概の順に、特に関わりが顕著な箇所を提示した。比較するにあたり『暁筆』、「曾谷殿」、「内房女房」、「上野殿母尼御前」の順に挙げ、参考として該当箇所がある場合のみ「衍論」も挙げた。まずは、冒頭の「A」から見ていく。

A 輪陀王の名の提示と紹介

乃往過去のむかし此閻浮提に輪陀王と申大王いまそがりける。徳風とくふう一天におほふてなびかぬ草木もなく、帝威ていゑ四海に
およぼしてしづまらざる風波ふうなみもなし。〔『暁筆』〕

例せば乃往過去に輪陀王と申大王いまそがましき。一閻浮提の主也、賢王也。〔曾谷殿〕

乃往過去のむかしの世に一の大王あり。名を輪陀と申。〔内房女房〕

古昔輪陀王と申せし王をはしき。南閻浮提の主也。〔上野殿母尼御前〕

過去世中有二大王。名曰輪陀。〔衍論〕

『暁筆』が使用する「乃往過去」、「閻浮提」、「申大王」の語を全て含むのは「曾谷殿」で、最も近い。但し、「内房女房」や「上野殿母尼御前」にも類似の語はある。波線部は三書にないが、内容は「曾谷殿」の「賢王」に対応している。

C 輪陀王の供御の説明

しかるに御供には麟鳳りんほうの稀なる味あじをもたしなみ給はず、穀稼こくかの勝たる菓くだものをも用ひ給はず、只白き馬の鳴声を聞召るれ

ば、

〔曉筆〕

此王はなに物をか供御とし給と申せば、白馬の鳴声をきこしめて身も生長し、身心も安穩にしてよをたち給。

〔曾谷殿〕

此王は白馬の鳴を聞て、色もいくしく、力も強く、供御を進せざれども食にあき給ふ。

〔内房女房〕

此王はなにをか供御とし給と尋れば、白馬のいな、くを聞て食とし給。

〔上野殿母尼御前〕

『曉筆』は、傍線部を「御供」とするが「供御」の意で用い、三書に拠ることが明らか。「曾谷殿」に近似か。波線部は三書にないが、内容は「内房女房」の「食にあき給ふ」に近い。ここは「衍論」にない箇所。

F 白馬（「衍論」は白鳥）の鳴く条件

又此馬白き鳥の鳴声をきかざれば、いな、く事なし。

〔曉筆〕

又此白馬は白鳥をみてなく馬なれば、

〔曾谷殿〕

又此白馬鳴事は白鳥を見て鳴けり。

〔内房女房〕

白馬のいな、く事は又白鳥の鳴し故也。

〔上野殿母尼御前〕

如_レ是諸鳥若見_二白馬_一即出_三其声_一。若不_レ見時常不_レ出声。

〔衍論〕

ここは「衍論」と三書で「馬」と「鳥」の関係が逆の箇所。「曾谷殿」、「内房女房」は白馬が白鳥を「見て」鳴くとするのに対し、「上野殿母尼御前」は白鳥が「鳴く」と白馬が嘶くとして、『曉筆』と同じ表現。ここは、三書の中でも「上野殿母尼御前」に拠る。

―白鳥が一斉に消失し、白馬が鳴かなくなつたこと

然にいかゞしたりけん、或時白き鳥悉くうせければ白馬鳴事なし。

〔『暁筆』〕

千万の白鳥一時にうせしかば、又無量の白馬もなく事やみぬ。

〔曾谷殿〕

白鳥皆失て一羽もなかりしかば、白馬鳴事なし。

〔内房女房〕

或時如何しけん、白鳥皆うせて白馬いなくなざりしかば、

〔上野殿母尼御前〕

爾時大王遍求白馬終日不_レ得。

〔『衍論』〕

集めていた鳥が「悉く」失せたとの内容から、三書に拠ることは明白（『衍論』とは内容を異にする）。「いかゞしたりけん」、「或時」の表現は、「上野殿母尼御前」に近い。三書中、「上野殿母尼御前」のみが鳥が消失した原因を推測しない（『日の箇所なし』）が、『暁筆』も同様で、ここは構成も「上野殿母尼御前」に近似する。

Ⅱ 白馬の鳴き声を聞けなくなつた王や周囲の様子

馬なかざれば、大王は月の蝕するがごとく、花のしほめるやうにならせ給ひ、御心をなやまし給へば、后妃九嬪も是を歎き、群臣百寮も此を悲みあへり。

〔『暁筆』〕

大王は白馬の声をきかざりしゆへに、華のしほめるがごとく、月のしよく（蝕）するがごとく、御身の色かはり力よはく、六根もうもうとして、ほれ（毫）たるがごとくありしかば、きさき（后）ももう／＼しくならせ給、百官万乗もいかんがせんとなげき、天もくもり、地もふるひ、大風かんばち（旱魃）し、けかち（飢渴）、やくびやう（疫病）に人の死する事、肉はつか（塚）、骨はかはら（瓦）とみへしかば、他国よりもをそひ来れり。

〔曾谷殿〕

白馬鳴ざりければ、大王の色も変じ、力も衰へ、身もかじけ、謀も薄くなりし故に国既に乱れぬ。他国よりも兵者せめ来らんに何とかせんと歎し程に、

〔内房女房〕

大王供御たえて、盛なる花の露にしほれしが如く、満月の雲におほはれたるが如し。此王既にかくれさせ給はんとせしかば、后・太子・大臣・一国皆母に別たる子の如く、皆色をうしなひて涙を袖におびたり。如何せん、如何せん。

（「上野殿母尼御前」）

『暁筆』は傍線部のように王の様子を「月」と「花」に譬え、続いて后妃、群臣らの様子を記す。この譬えを用い、次に王以外の人々を挙げるのは「曾谷殿」と「上野殿母尼御前」。なかでも「蝕」、「しほめる」の表現は「曾谷殿」に近い。

N 馬鳴が王に仏法を弘通（仏法に帰依）することを条件に、白馬を鳴かせることを奏す

「此国は外道おほくして、君又かれを御帰依ある故に、白鳥も去、白馬不^レ鳴。主上若し仏法を御帰依あらば、経力をもて彼白鳥を祈り帰し、白馬をなかせ奉らん」とぞ奏しける。 （『暁筆』）

めしいだされければ、此僧の給はく、国中に外道の邪法をとめて、仏法を弘通し給べくば、馬をなかせん事やすしといふ。 （「曾谷殿」）

ここは三書中でも、「曾谷殿」のみに見られる箇所で、『暁筆』はそれに拠る。傍線部の表現は異なるが、これは「K」に類似表現がある。Kは、王が白馬を鳴かせた方を信じると宣言する箇所だが『暁筆』はその内容を採らない。三書はそこで国の宗教状況を挙げ「曾谷殿」では、「此国にもとより外道をほく、国々をふさげり。又仏法という物をほくあがめをきて国の大事とす」、「内房女房」では「国には外道多し。皆我帰依し奉る」と記す。『暁筆』はこの表現をふまえ、採らない箇所の内容も補いながらまとめている。

さらに、『暁筆』は二重傍線部で「経力」の語を用いる。これは「上野殿母尼御前」のP（馬鳴が白馬を鳴かせる箇所）に「諸仏の御本尊とし給法華経を以て七日祈しかば」とあるため、これを意識したのである。『暁筆』は「P」を「彼沙門即白き鳥を祈帰し、白馬をなかせたり」と、「祈帰」の語を用い、このNと表現は対応させるが結果のみを述べる。『暁筆』

は王の宣言（K）や競い合い（L）を撰取しないから状況は記せないが、それをふまえたような表現を用いる。このNは構成を「曾谷殿」に拠るが、表現の撰取は三書に及ぶ。これは、『曉筆』作者が三書の内容を熟知していたことを示している。このように、三書に拠り、その構成や表現を撰取するが、一話の帰着点は三書とは異なる。末尾近くのQ（再び白馬の鳴き声を聞いた王の様子）も「衍論」ではなく、三書に拠る。しかし、白馬が一声鳴いたときと百千が一斉に鳴いたときに分けて記す三書に対して、『曉筆』はそれをまとめて記す。

大王是を聞召、竜顔は月のみつるがごとく、叡慮は花のひらくるにことならずして、仁は万国の外にながれ、めぐみ
は四海の波よりもしげく、万機の政は千春の花久しくさかへ、万乗の宝算は千秋の月遙に明らかなり。（『曉筆』）

傍線部で「竜顔」と「叡慮」を挙げることは、「D」（白馬の効果）の「竜顔も御心よげに叡慮もはかりことかしこかりけり」に対応する。また、「月のみつるがごとく」、「花のひらくるにことならずして」は、前掲Jの「月の蝕するがごとく、花のしほめるやうにならせ給ひ」と対になる。さらに点線部も、前掲Aの「帝威四海におよぼしてしづまらざる風波もなし」に対応し、三書に拠りながらも、表現が対になるよう一話の中で工夫している。

この後三書は、王以外の様子や外道の寺が仏寺に改まったことなど、その後の国の様子（R）を記して終え、次の話題に移る。『曉筆』は、このRを採らずQに続けて末尾（S）で「これ沙門の功によりとて、其名を馬鳴と申とぞ」とこれが馬鳴の名の由来になったことを記し、馬鳴説話として総括する。これは三書にない内容で「衍論」に拠る。先述したように『曉筆』は別記文で「衍論」の書名を挙げていることから、「衍論」が原典であることやその内容を把握していたのであろう。

このように『曉筆』は全体を三書に拠りながらも帰着点を違えるが、これは本話が収録されている巻と関係がある。巻十は、「似類下」の巻題を有し、巻の初めから相並んで存在する二話、もしくは三話が互いに類似の主題を持つように配されている。前話、第二十四「馬鳴菩薩」は、中天竺の外道であった「馬鳴」が協尊者の弟子となり、説法で活躍する姿を

描く。そして、その説法を聞いた馬も悟ったことから「馬鳴」と号したこと、また様々な功德から多くの名があることを記す。前話を「馬鳴」説話としてその名付けに焦点をあてることから、本話もそれにあわせて「馬鳴」説話となるように総括している。⁴⁾

以上のことから、『暁筆』は本話の構成、大要を「曾谷殿」に拠り「曾谷殿」の表現を重視しながらも、「内房女房」や「上野殿母尼御前」の表現や内容を摂取し、構成も含めて三書を融合させて一話を形成していることが理解される。但し、末尾は三書と異なり、「衍論」の結論で総括し、三書に拠りながらも独自の一話としてまとめている。

四、『暁筆』中に見られる本話以外の輪陀王故事の記述

さて、この輪陀王の故事は、日蓮書簡でも三種の書簡に用いられ、日蓮が好んだ故事の一つだが、『暁筆』も他二箇所（卷九（似類上）、第十三「紺泥駒」と卷十五（食事）、第六「輪陀王」）に記述があり、その中の卷十五、第六「輪陀王」に三書の影響が見られる。卷十五は「食事」の表題を有し、「食」に関する説話を収録する。そのため、第六「輪陀王」も食事に重点を置く。本文は「過去の世の輪陀王と申奉るは、白馬の声を聞しめし、これをもて供御として宝算を持給へり。如似類」とあるのみ。「如似類下」と本話（卷十、第二十五）に詳細な記述があることを示し、「供御」、「宝算」と本話を想起させる語を用いる。本文も「食」に焦点を当てるが、それに続く別記文ではこれを補強するように「それ一切の有情、其心さまざま也といへ共、いづれも食物によらずして命を持ことなし」として食事に關して仏典から記す。列挙の内容は異なるが、この故事を「食」と結びつけ、「食」と「命」の關係を述べることは、「曾谷殿」や「上野殿母尼御前」の影響と思われる。「曾谷殿」はこの故事を、法華經と諸仏の関わりを食事で説明する譬えの一例として引く。故事の前に「一切衆生又食するによりて壽命を持。食に多数あり」として、衆生から鬼神、そして諸神や仏の食を列挙し、諸神、仏が仏法を身

とし、魂とする譬えとして「例せば乃往過去に輪陀王……」と、この故事を挙げる。寿命と食との譬えでこの故事を用いること、その提示方法を『暁筆』は意識している。また、「上野殿母尼御前」は、諸仏が法華經を守護する理由を説く中で、法華經は諸仏の父母であり、めのとであり、主であると説き、それを「食」との関わりで説明する。続けて仏が法華經を命とし、食とし、すみかとしていることから「此經なき国には仏まします事なし」として輪陀王の故事を挙げる。ここでも「命」と「食」の關係に譬えて説いている。

『暁筆』が卷十五の食事の巻にもこの故事を収録したのは、この日蓮の譬えに拠ると思われる。『暁筆』作者は三書内でのこの故事が持つ意味を理解していたのであろう。

また卷九、第十三「紺泥駒」では「色」に着目し、白色の例の一つにこの故事の馬と鳥を挙げる。これに直接的な三書の影響はないが、この故事を異なる視点から複数箇所再録することは日蓮著作の摂取の特徴ともいえよう。

五、日蓮書簡の摂取の特徴とその影響

以上、卷十、第二十五「輪陀王」が日蓮書簡を典拠としていること、なかでも「曾谷殿」の構成を重視するが、表現とともに三書を融合して摂取していることを確認した。同一の話材を同一著者の複数の書から摂取することは、日蓮著作以外を摂取する際には見られない傾向である。『暁筆』が典拠から摂取する際は、該当箇所を一字一句同じと思われるほど忠実に引くことが多く、例えば『三国伝記』所収の二話を典拠として一話を形成する場合でも、その該当箇所は忠実に摂取していた。これに対して本話はこれまでと異なり、三書を融合した形で表現も変えながらの摂取である。但し、これは日蓮著作がまとめられた時期、その書の流布状況を考える必要がある。

また本話は、別記文で「衍論」の經典名を記し、末尾を「衍論」の結論で総括する。これは前述したように、本話が収

録される巻の特性に従い、前話と同じ主題でまとめているためである。但し、これ以外は三書に依拠する。原則として『暁筆』は仏典重視の姿勢があり、依拠資料と仏典で内容が異なる場合に言及する姿勢が見られる。しかし、本話は別記文で「ひが事」かとして「衍論」を示すが、馬と鳥の関係には言及しない。さらに、この故事を別の箇所にも再録し、三書の影響と思われる解釈も提示していた。これらも、日蓮著作を撰取する特徴といえよう。

以上のことから、『暁筆』作者は三書を熟知していたことが窺える。作者が日蓮宗の僧であれば自明のことであろうが、本話の総括は原典の「衍論」に拠り、日蓮の名も記さず、ことさらにその説を強調してはいない。但し、三書を知る読者であればそれを理解し、より深い解釈を楽しめたであろう。むしろ、融合させることで普遍的な説として提示しているとも考えられようか。この他の日蓮著作の影響については、今後の課題としたい。

注

- 1 拙稿『「榻鳴曉筆」における『法華経』重視の姿勢（二）―日蓮著作の撰取―』（博士論文『「榻鳴曉筆」の構想―先行説話の撰取方法を手がかりに―』第三篇・第二章 愛知淑徳大学大学院文化創造研究科 二〇二〇年）。
- 2 二字下げ文を「別記文」と称する。『曉筆』諸本により別記文の採否に異同は見られるが、確認した諸本全てにこの形式は認められ、別記文形式になっていない場合でもその内容が欠けているのではなく、「本文」扱いとしてその内容は存在する。さらに、別記文の内容が本文で引かれる場合もあることから、別記文を「本文」と同時期の成立として扱う。
- 3 日蓮書簡の引用は立正大学日蓮教学研究所編纂『昭和定本日蓮聖人遺文』第二卷（改訂増補版第二刷 一九九一年）による。「曾谷殿御返事」（No.三三九）、「内房女房御返事」（No.三七六）、「上野殿母尼御前御返事」（No.三八八）。
- 4 第二章で挙げた別記文で「又付法蔵の第十二祖馬鳴といひしは中天竺の外道也。脇尊に伏せし人なり。輪陀王の因縁は過去の事也。両儀可留心」と前話と本話の二話に対する評になっていることから、主題を合わせたことが窺える。

*引用に際しては新字体を使用し、私に傍線を付した。